

### <要求の指さし>



赤ちゃんは、10～11ヶ月頃になると、目に入ったもの、気になったものを指さしするようになります。

たとえば、外で犬をみつけて「ん、ん！」と、指さします。それは、「ほら、何かいるよ。ぼく、みつけたよ。」と、そばにいる大人に訴えているのです。

大人は、「あ、ワンちゃんがいたね。可愛いね。」などと、言葉を返します。子どもは、自分の発見したものを大人に受け止めてもらい、安心します。そして、繰り返し答えてもらううちに「これは、ワンちゃんというものなのだ」と、認識していきます。

この頃になると、次から次へと「ん、ん！」と、指さしをするようになります。「あれは、〇〇だね。」「これはね、〇〇だよ。」と、大人はそれに答えてあげるのに大忙しです。

今まで、何気なく見ていた世界の中に、はっきりと自分の注目するものがみつき、「おもしろい」「きれいだな」「すごいなあ」と、感動するのでしょうか。その発見の喜びを誰かに伝えたいと、指さしをします。だからその視線の先には、必ず子どもが興味を持つ何かがあるのです。また、遠くにあるおもちゃが欲しくて、「あれを取って」、「イチゴが食べたい」とイチゴを指さすなど、要求を表現する場合があります。いずれにしても指さしは、言葉を話せるようになる準備段階の、心の中の言葉であると言えます。

でも、せっかく子どもが感動して、誰かに伝えたいと指さしをしても、周りの大人が、それに気づかなかったとしたら、どうでしょうか？子どもはそのうち、指さしで訴えるのをあきらめてしまうかもしれませんね。大人が、子どもの指さすものを一緒に見て、その発見に共感し、言葉を返してあげることで、気持ちも満たされると同時に、認識も育っていくのです。一つひとつの指さしを丁寧に受け止め、返してあげましょう。子どもは、身近な第三者（お母さんや保育者）とともに、第三者（別の人や、動物、おもちゃなど）を共有し、不安を乗り越え、探索していく力を身につけていきます。

大人が主導で「ほら、これは〇〇だよ」と、教えられることが多かった生活から、今度は、子どもが自ら指さしをして、遊びや生活の主人公になっていくという、大きな変化だと言えるでしょう。

（文 ここすき！プロジェクト保育士）